

第2回 沖縄戦 戦没者遺体収容体験

～参加者の声～

今年で2回目になります、「沖縄戦戦没者遺体収容体験」を平成18年2月10日から3日間の日程で約20名の参加者と共に参りました。(詳細は1面に掲載)

初めは旅行気分だった参加者も、説明会での「戦後の現状」や「日本政府の取り組み」について話を聞き、作業する場を確認したことによって徐々に、真剣な表情に変わっていくように見えました。

知っていたつもりの戦争を、改めて別の角度から知る貴重な体験となったようです。

今回の活動に参加して感じたことを忘れず、少しでも多くの方々と伝わっていくことを期待します。

ここで参加された皆さんの声を紹介します。

本当の終戦
青木 浩一



戦争が終わって60年以上経つのに、今この沖縄には戦争で亡くなられた方が手付かずのまま瓦礫の下に眠っています。この現実には気が付かされたのは、36年の人生の中で大変な驚きでした。

現地では40数年間にも亘り、たった一人で遺体を探し続けている国吉さんに出会いました。その方がもう既に何十体もの遺体を探し出されていきました。その現場や写真を見た瞬間、強い憤りを感じました。

「日本国はいったい何をしているんだろ。」塩川副理事長が30年前に思われた気持ち、この「NPO法人 戦没者を慰霊し平和を守る会」を結成させたのだと思います。

国や県、行政に訴えても何もしないのなら、私達がやるしかありません。この先はメディアに広く訴えて、一人でも多くの参加者を募り、本当の終戦を迎えたいと思いました。

驚き!
江藤 由勝



驚きました。今まで私のイメージしていた沖縄とは、全く違った所でした。初日の説明会の後、遺体収容現場で沖縄戦を経験された高田さんが、「私の戦友は、戦争が終わったのも知らされずに今も戦っているのですよ。」と言われた言葉に、自分が今この場所にいる必要性を改めて実感させられました。

作業は地道で大変でしたが、こういう形で訪れなければ知ることのなかった、貴重な3日間でした。

この体験を、1人でも多くの人に知ってもらい必要性を感じました。

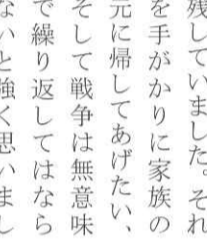
機会があれば、次は自分の息子も参加させたいと思いました。

私たちに出来る事
岡本 隆宏



戦没者遺体収容に参加し、戦後60年以上経過しても収容されていない人々がいることに驚きました。

意識を変えた体験
佐藤 栄二



実際作業をして、戦没者は私達に何かを訴えるように遺品を残していました。それを手がかりに家族の元に帰してあげたい、そして戦争は無意味で繰り返してはならないと強く感じました。

今、私たちに出来る事は、1人でも多くの戦没者を収容し、沖縄の現状を多くの人々に語り継ぐ事だと思います。

今回は、人生の中で貴重な体験になりました。ありがとうございました。

私の戦争体験
土肥 和美



沖縄と言えばまず、最初にリゾート観光と、頭を過ぎる人が大勢だと思えます。当然私もその中の1人です。

初日の説明会のこと、現地で47年間、1人で遺体収容されている、国吉さんの話を何の疑問を抱く事なく聞いていました。また、戦争についても、学校の教科書やドラマの一部で、他人事としか捉えていませんでした。

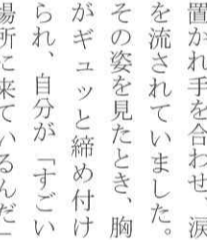
遺体収容現場に行き、戦争体験者の白髪のおじいさん(高田さん)が、岩や土に埋もれた場所で「オイ、来たぞ」と小さな声でつぶやいてタバコに火をつけ、そっと岩肌を置かれ手を合わせ、涙を流されていた。胸がギュッと締め付けられ、自分が「すごい場所に来ているんだ」と感じました。

戦後60年、国は、「遺骨収集は終わった。」と言っているが、今も多くの遺体が遺族の元に帰っていない現実を腹立たしさや怒りを感じました。もっと多くの人にこの事を知ってもらいたいと思いました。

自分の役目
西 公太郎

戦没者遺体収容に参加し、戦後60年以上経過しても収容されていない人々がいることに驚きました。

平和に隠れた戦争の足跡
野中 達夫



戦後60年、国は、「遺骨収集は終わった。」と言っているが、今も多くの遺体が遺族の元に帰っていない現実を腹立たしさや怒りを感じました。もっと多くの人にこの事を知ってもらいたいと思いました。

今回、戦争体験者のお話を直に聞いたことや遺体収容に携われない私にほんの少しはありますが、戦争体験者であるのだと痛感しました。

今回、戦争体験者のお話を直に聞いたことや遺体収容に携われない私にほんの少しはありますが、戦争体験者であるのだと痛感しました。

戦没者に對する想い
原田 薫



正直、目的が沖縄と言うだけの安易な気持ちで今回の研修に参加しました。沖縄が戦争で唯一地上戦の地となり、多くの犠牲者が出た事はなんとなく理解していましたが、私自身の中で、戦争は過去の出来事、教科書の中の歴史としか捉えておらず、今はただ観光地としてのイメージしかありませんでした。

ですから、未だ戦没者の遺体・遺品が私達の生活の身近に野ざらしにされたままになっていないとは思っていませんでした。本当に自分が遺体(お骨)を収容した時は、「戦争はまだ終わっていない、もっと自分の身近にある事なんだ」と気付かされました。そして、この事実をもっと多くの人達にも知ってほしいと強く感じました。

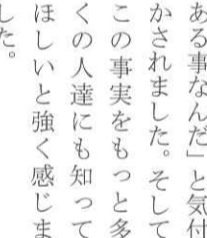
戦後生まれの私には、戦争の悲惨さを頭の中では理解出来ていたつもりでしたが、それを心から自分の事として理解するには、戦争体験者とはあまりにも温度差があるのだと痛感しました。

今回、戦争体験者のお話を直に聞いたことや遺体収容に携われない私にほんの少しはありますが、戦争体験者であるのだと痛感しました。

戦没者に對する想い
原田 薫

戦没者遺体収容に参加し、戦後60年以上経過しても収容されていない人々がいることに驚きました。

戦没者に對する想い
原田 薫



亡くなられた方の多さ、激戦の凄まじさが身に沁みました。そして二度と悲惨な戦争を起こしてはならないと改めて心に刻み込みました。

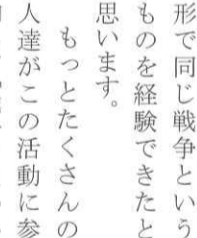
この貴重な体験を家族や職場の同僚に語り、戦争のない平和な世の中にしていかなくてはならないと思います。

沖縄には60数年経った今でも数多くの人が骨が埋まっていたと聞いていますが、実際にその事実を目の当たりにし、褐色の土の中から一部だけが見えている骨を前にすると、この人たちがここから助け出したいという、今までの生活の中で感じたことのない強い感情に襲われました。

また、私は亡くなった方々の骨を「遺骨」と呼んでいましたが、塩川副理事長が「遺骨ではない。正確には白骨死体だ。」と言った言葉には、目が覚める思いがしました。

私は、沖縄に住んでいまして、この体験

戦没者に對する想い
原田 薫



どういった旅行になるのか、不安の中で始まった旅行だったのですが、1日目の説明会で、これは大変なことなのだと思わされました。普段は考えない戦死という事を考えさせられ、命の尊さを感じました。

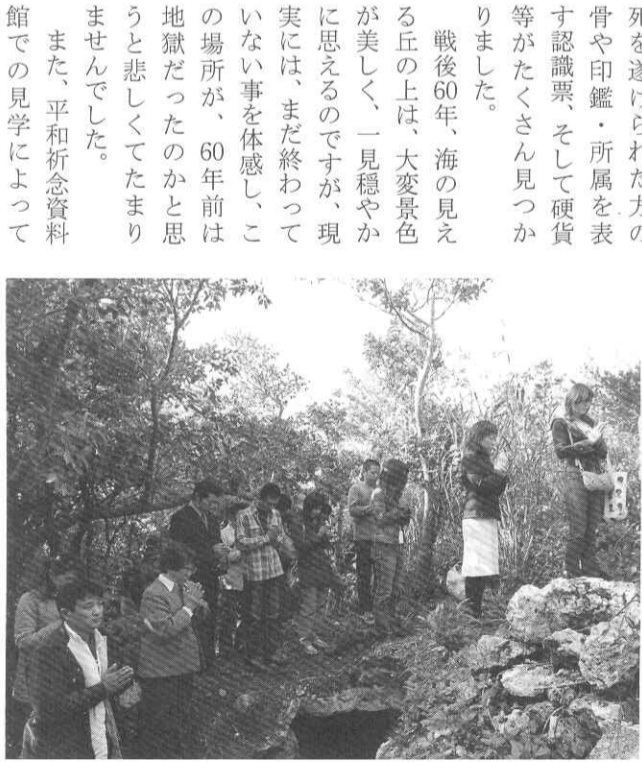
発掘作業は、不安よりも少し楽しみを感じながら作業し、骨が発見されたときは、当時その場所を実際に人がいたのだと思ひ、なんともいえない思いがありました。

この3日間で感じたのは、今まで何となく生活している毎日なのですが、改めて命の大切さ、人という存在の大切さを感じました。

また、見ず知らずの人々と集まって、集団で一つの事を成し遂げた事に、達成感を感じ、私自身にとってもいい体験ができたと思います。

戦没者に對する想い
原田 薫

戦没者遺体収容に参加し、戦後60年以上経過しても収容されていない人々がいることに驚きました。



冥福を祈って手を合わせる参加者

どういった旅行になるのか、不安の中で始まった旅行だったのですが、1日目の説明会で、これは大変なことなのだと思わされました。普段は考えない戦死という事を考えさせられ、命の尊さを感じました。

発掘作業は、不安よりも少し楽しみを感じながら作業し、骨が発見されたときは、当時その場所を実際に人がいたのだと思ひ、なんともいえない思いがありました。

この3日間で感じたのは、今まで何となく生活している毎日なのですが、改めて命の大切さ、人という存在の大切さを感じました。

また、見ず知らずの人々と集まって、集団で一つの事を成し遂げた事に、達成感を感じ、私自身にとってもいい体験ができたと思います。